

言い換え後置分析と後置表現の認定

富 樫 純 一

〈キーワード〉 後置表現、言い換え、検索、repair、ポーズ

〈要 旨〉

本稿は、後置表現の中に「言い換え後置」という現象があることを指摘し、その発話制約、そして後置表現の中での「言い換え後置」の位置付けを検討することを目的としている。

「言い換え後置」はある述語句に先行要素と後置要素の二つの要素が同じ関係としてかかっている。この特徴を考慮することで、基本的な発話制約として、その要素間の「指示の同一性」および「情報構造の一致」を挙げることができる。

また、「言い換え後置」が後置という表現の枠組みの中でどのように位置付けられるのか、という点に関して、その認定の問題に即して検討している。一つは検索マーカー付加という観点、一つはポーズの有無という観点、もう一つは repair の観点からである。その結果として、「言い換え後置」は後置表現と repair の狭間にある表現として位置付けられること、さらにはポーズの有無が後置表現かそうでないかを認定するための大きな基準となっていることを示した。

1. 問題の所在

後置表現の研究において、以下の(1)～(3)のような表現がどのような位置付けになっているかということを考えると、ほとんど扱われていなかったのが現状である。

- (1) そしたら部屋にないんですよ、楽屋に。
- (2) あの人が殺ったんじゃない？ 田中さんが。
- (3) その辺にいると思うよ、隣の部屋とかに。

これらは、述語句までにある要素((1)では「部屋に」)と述語句の後ろにある要素((1)では「楽屋に」)が述語に対し同じ関係としてかかっている。このような要素を含む表現を後置表現と捉えるに当たっては、第一に(1)～(3)を後置表現として認定できるのかという点、第二にいわゆる repair として処理できるのではという問題がある。この二点が主な要因となり、これらの表現は後置表現としての研究対象からはずれていたと思われる。

しかし、述語句の後ろに何らかの要素が位置していること、さらにその要素が直前の述語句にかかっていることを考えると、これらを後置表現として捉えることが可能である。本稿ではこれらの表現を後置表現の一種と捉え、「言い換え後置」と呼ぶことにする。文字通り、下線部の要素が先行する要素を「言い換え」ているからである*1。

この言い換え後置という表現は、先行研究では宮地（1984）および丸山（1996）で多少、現象の指摘が行われているが、管見の限りそれ以外では見られない。しかも宮地（1984）はこの表現を後置表現とは認定せず補充の表現として捉えているが、丸山（1996）では後置表現と捉えている、というように、この表現の捉え方に食い違いが見られる。

本稿の目的は、一つ目として、言い換え後置に関する発話制約の記述を行うこと、二つ目に「言い換え」の側面から「検索」という心内の情報処理に関する問題に焦点を当てること、最後にそれらを元に後置表現という枠組みの再構成を試みることである。

2. 言い換え後置の発話制約

「言い換え」というシステムが組み込まれた表現が実際に発話される上で、どのような制約を必要とするのか。言い換え後置表現においては先行要素と後置要素の関係を無視することはできない。本節ではこの問題について検討する。その際、中心となるのは先行要素と後置要素の情報レベルにおける関係である。本節では例文の検討を元に、いくつかの発話制約を記述する。

なお、本節で扱うのはあくまで言い換え後置の発話制約記述であり、いわゆる repair*2 全体に対する枠組みではないことを明記しておく。repair と言い換え後置は、その機能的特質においては類似しているが、ここでの記述が即、repair すなわち「言い換え」という行為全般の記述にはなり得ないことに注意されたい。

2.1. 照応の問題

言い換え後置の発話として自明なのは、まず単純に、先行要素に対する言い換えの結果が反映されていない後置要素になっている表現は許容されない。つまり、先行要素の情報をキャンセルしている表現は許容されないのである。

- (4) *田中さんが殺ったんじゃない？ 鈴木さんが。
- (5) *東京は住むところじゃないよ、茨城は。
- (6) *あそこは住むところじゃないよ、ここは。

これは、後置要素が先行要素を照応しなければならない、という制約を示している。またさらには、照応の問題として、言い換え後置には指示詞を含んだ例が見られる*3。

- (7) あの人が殺ったんじゃない？ 田中さんが。
- (8) 田中さんが殺ったんじゃない？ あの人が。

- (9) あそこは住むとこじゃないよ、東京は。
- (10) 東京は住むとこじゃないよ、あそこは。
- (11) 位牌とそれからあれに書いてあるじゃない、あの石碑に。(国研(1960)より)

この二点から、基本的に先行要素と後置要素の間に指示対象の一致が認められなければならないといえる。これを「指示の同一性」の確保とする。言い換え後置発話の基本的な制約は「指示の同一性」の確保であると考えられる。

- (12) 東京ってすごく広いね、日本の首都って。
- (13) 日本の首都ってすごく広いね、東京って。

指示詞によって照応するのではなく、表現形式(いわゆる名称)を変えて言い換えを行っている例も考えられる((12)(13))。このように、同一の指示対象であるが、その表現形式が異なっているような例もまた同様の制約に基づいていると考えられる。(7)~(11)が文脈に対して照応を行っている例であり、(12)(13)が当該文脈ではなく話し手の知識に対して照応している例である。(7)~(11)と(12)(13)は情報処理レベルでの違いであるとはいえ、先行要素と後置要素の「指示の同一性」はどちらも確保されている。したがって、いずれも許容される。

2.2. 情報的限定

上で見た「指示の同一性」が確保されていても、次の例のように先行要素と後置要素が入れ替えられない表現が存在する。

- (14) そしたら部屋にないんですよ、楽屋に。
- (15) 敬語を間違ってるのはテレビでも見受けますよね、時代劇とかでも。
- (16) シェドウアンドスプレnderって日本語に訳すと「影と輝き」、直訳すると。

これらの言い換え後置では、先行要素の情報を後置要素の情報によって限定している。どちらの要素も指し示している対象は文脈上一致しているが、後置要素がより限定的な情報を表わしている。(14)~(16)の先行要素と後置要素を入れ替えるといずれも許容度が下がる。

- (17) ?そしたら楽屋にないんですよ、部屋に。
- (18) ?敬語を間違ってるのは時代劇とかでも見受けますよね、テレビでも。
- (19) ??シェドウアンドスプレnderって日本語に直訳すると「影と輝き」、訳すと。

このことから、先行要素の情報が後置要素の情報によって「より限定される関係」で

なければならないといえる。もっとも、当該文脈でより詳細と判断される情報が「言い換え」られるわけであり、その意味で「情動的」と断っている。よって、上の (17) ~ (19) が許容される文脈も当然あり得るし、(17)~(19)の許容度に差が生じるのもその理由による。

この「より限定される関係」は、上の例のように上位一下位という概念を示している場合の他にも、全体一部分関係などを示す場合においても成立する。次の例でも「より限定される関係」を保たない場合にはその許容度が下がる。

- (20) ゴルフクラブで殴られちゃったんだよ、アイアンで。
- (21) 犯人らしき奴なら車に乗って行っちゃったよ、タクシーに。
- (22) 太郎ったら電話で用件済まそうとしてるの、携帯で。
- (23) ゴルフクラブで殴られちゃったんだよ、ヘッドの部分で。

- (24) ?? アイアンで殴られちゃったんだよ、ゴルフクラブで。
- (25) ?? 犯人らしき奴ならタクシーに乗って行っちゃったよ、車に。
- (26) ?? 太郎ったら携帯で用件済まそうとしてるの、電話で。
- (27) ?? ヘッドの部分で殴られちゃったんだよ、ゴルフクラブで。

もちろん(24)~(27)もまた「先行要素 → 後置要素」の関係が「より限定される」関係となるような文脈においては許容される表現となる。実際の会話においては、結局のところ、語彙レベルと情報レベルとのしぎあいによって許容されるか否かが決定されるといえる。

「より限定される関係」という制約については、いわゆる情報の流れ (information flow) の原則をその根拠に挙げることができる。

- (28) 旧から新へのインフォメーションの流れ 文中の語順は、古いインフォメーションを表わす要素から、新しいインフォメーションを表わす要素へと進むのを原則とする。
(久野 (1978), p.54)

この久野 (1978) の記述に従うと、被限定要素を古い情報 (あまり重要でない情報)、限定要素を新しい情報 (より重要な情報) と考えることで説明が可能になる*4。つまり、より限定される情報はより文末へ位置しなければならないのである。

また、久野(1978)、高見(1995a, b)の記述に基づき、富樫(1998)では information flow の原則を拡張して捉えている。いわゆる通常の文末述語文以外にも久野(1978)あるいは高見(1995a, b)を適用するというものである。これに従えば、後置表現の後置要素がより限定された情報になり、決して逆にはならないという事実が説明できる。以下の模式図は富樫 (1998) に修正を加えたものである。

- (29) <文頭>あまり重要でない情報 —————> より重要な情報<文末>
 || ||
 (より漠然とした情報) (より限定された情報)

言い換え後置の入れ替えテストによる許容度の低下は、この原則が働いた結果であると考えられる。このことから、「指示の同一性」以外にも情報の「限定」関係を information flow に従って維持しなければならないという制約を認めることができる。

ここまできをまとめると、言い換え後置において先行要素と後置要素の情報は、その質的な点において、「先行要素 \leq 後置要素」という相対的な関係を保たなければならないことになる。以下、類例を挙げる。

- (30) 本見せて、今読んでるの。
 (31) ?今読んでるのを見せて、本。
 (32) (太郎という人物が何人もいる場合)
 あそこに太郎がいたよ、山田太郎が。
 (33) (太郎という人物が何人もいる場合)
 ?あそこに山田太郎がいたよ、太郎が。
 (34) 田中さんが殺ったんじゃない? あの田中さんが。
 (35) 東京って広いね、東京ってところは。
 (36) ??あの田中さんが殺ったんじゃない? 田中さんが。
 (37) ??東京ってところは広いね、東京って。

(34) (35) のように後置要素が強調された繰り返し表現になっている場合も「限定」として捉えることができる。これは、先行文脈で取り上げられた情報を強調して繰り返すことで、「他の誰でもない、今話題になっている田中さん」という限定を行っているのである。つまり、文脈情報として「先行要素 \leq 後置要素」という関係を維持していることになる。したがって、当然、これらも要素同士を入れ替えると許容度が明らかに下がる((36) (37))。

いずれの例も結局は「情報的限定」の制約に則っていることになる。特に(32) (33)は「限定」制約が文脈依存、語彙レベルの情報だけでは捉えきれないことを示している。表現形式レベル(モノの名前)においても相対的な差が現れることを示唆している。

なお、単なる繰り返しの形を取る言い換え後置も同様であるといえる。

- (38) 財布落ちましたよ、財布。
 (39) 涼しいところに行きたいな、涼しいとこに。
 (40) あとからそこへ入れたんだって、そこへ。(国研(1960)より)

これらは (34) (35) と同様に、強調解釈がもっとも自然であると思われる。後置要素に強調イントネーションが付されている発話のほうがより自然な発話として受け入れやすいという事実からも、これらの例が文脈情報レベルでの「限定」を行っていると考えるのが妥当である。

2.3. 情報構造の一致

前節までで、「指示の同一性の確保」という制約、および、information flow の原則による「限定」の制約を記述した。しかし、この二つの制約では説明できない例が見られる。本節ではその表現の検討を行なう。

言い換え後置では、以下のように許容度に差が生じる例が見られる。

(41) その辺にいると思うよ、隣の部屋とかに。

(42) 何人か呼んできてよ、3人ほど。

(43) そのうち来るんじゃない？ 明日あたり。

(44) *その辺にいると思うよ、隣の部屋に。

(45) *何人か呼んできてよ、3人。

(46) *そのうち来るんじゃない？ 明日。

(41)～(43)と(44)～(46)の、先行要素と後置要素の情報はいずれも「より限定される関係」になっている。その点では前節で挙げた「限定」の制約に違反していない。にもかかわらず、(44)～(46)の例だけが許容されない。(41)～(43)と(44)～(46)の違いは、後置要素に、対象に曖昧性を付加する表現「とか」「ほど」「あたり」があるかないかという点にある。先行要素に関しては(41)～(43)のいずれにも曖昧性が見てとれる。「その辺」「何人か」「そのうち」はそれぞれ漠然とした対象を指し示しており、確定的な一つの対象を示しているわけではない。

しかし、(44)～(46)の後置要素には何らかの曖昧性は見られない。この先行要素と後置要素における曖昧さの有無による情報的な不一致によって、許容度に差が生じていると考えることができる。以下も同様の例である*⁵。

(47) もうすぐ始まるよ、10分程したら。

(48) しばらく待っててください、30分ぐらい。

(49) 7時すぎに到着予定です、(7時) 10分ごろに。

(50) *もうすぐ始まるよ、10分後に。

(51) *しばらく待っててください、30分。

(52) *7時すぎに到着予定です、(7時) 10分に。

つまり、先行要素の情報に認められる曖昧さを、後置要素の情報でも維持しなければならないのである。これを「情報構造の一致」と呼ぶことにする。先行要素の情報に存在する概念的な構造は、後置要素においても保持されなければならない。これは逆に、次のように後置要素が曖昧な情報で先行要素が確定した情報となった場合でも同様である*6。

- (53) *そこにいると思うよ、隣の部屋とかに。
- (54) *3人呼んできてよ、何人か。
- (55) *明日来るんじゃない？ そのうち。
- (56) *10分後に始まるよ、もうすぐ。

これらの事実を踏まえると、言い換え後置において、先行要素と後置要素の「情報構造」的な枠組みとでも呼ぶべきものは必ず一致させる、という原則が導出される。また、

- (57) ゴルフクラブで殴られちゃったんだよ、ヘッドのあたりで。
- (58) *ゴルフクラブとかで殴られちゃったんだよ、ヘッドの部分で。

(57) が許容されるのは、「ゴルフクラブーヘッドのあたり」という全体一部分関係のため、「部分」の情報が「あたり」という表現によって曖昧になっていても「全体」という枠を越えることはないと考えられるからである。これが逆の情報構造の関係になっている場合、許容度が著しく下がることを確認されたい。

次に副詞句の言い換え後置について見てみる。

- (59) 論文少し出来たよ、ちょっとだけ。
- (60) 論文全然出来てないよ、これっぽっちも。
- (61) *論文少し出来たよ、全く。
- (62) *論文全然出来てないよ、ちょっとだけ。

- (63) ??論文ちょっとだけ出来たよ、少し。
- (64) ??論文これっぽっちも出来てないよ、全然。
- (65) 論文全然出来てないよ、少しだけしか。

(59)～(62)のように、副詞句の言い換え後置についても情報構造の一致の制約が当てはまる。(61)(62)は情報構造が一致していないため、非常に不自然となる。しかし、例外的な事象もある。(59)(60)と違い、(63)(64)が不自然になることは、情報構造の一致からだけでは説明できない問題であると思われる。ただし(63)(64)は、「すこーし」「ぜーんぜん」というような強調発話にすると許容度が多少上がる。音的特徴の度合

いと相関関係があるとも考えられるが、詳細は今後の課題である。

また、(65) に関しては、後置要素がどのような心内の処理を経て提示されるのかという問題である。(65) が多少ゆれがあるにしても、許容される表現である点は非常に示唆的である。しかし、この例の扱いもまた今後の課題である。

2.4. 2. 節のまとめ

本節では「言い換え後置」の発話制約について議論を進めてきた。まとめると以下のようなようになる。

- (a) 先行要素－後置要素間の「指示の同一性」は確保しなければならない。
- (b) 後置要素は何らかの形で先行要素よりも「限定」された表現になってもよい。しかし、先行要素のほうがより「限定」されている場合には許容されない。
- (c) 「情報構造」という要素が持つ情報の枠組みを一致させなければならない。
- (d) (b) (c) の条件は (a) が前提条件となっている。

また、言い換え後置の必要条件を検討するに当たって、心内において先行要素と後置要素の情報とどのような関連性を持って処理されているのかが重要なポイントとなる。次節では、談話管理理論に基づき、特に情報の「検索」という概念を中心に、「言い換え」のシステムを模索し、さらには後置表現認定の問題に焦点を当てていく。

3. 後置表現の認定について

言い換え後置という表現が認められる以上、単にある要素が述語の後ろに位置している、という規定では、後置表現の認定は困難になってしまう。そこで、「検索」などの談話管理理論を用いて、新たに後置表現というものの位置付けを行う必要がある。「言い換え」という情報処理システムを十分に考慮した上で、後置表現の枠組みを考え直す必要があるのである。つまり、言い換え後置が後置表現としてどのような位置付けとなっているか、を明らかにしなければならない。その検討に当たって、もっとも根本的な疑問となるのは「後置要素の前に何らかのマーカ（ディスコースマーカ）が付与されていても後置表現として捉えられるのか」という点である。

以下では、心内領域での情報処理に関する議論を中心に据え、言い換え後置において後置要素の直前に何らかの情報処理をモニターするマーカが付いた場合の、その振る舞いの異なりを足がかりとし、後置表現全体の位置付けを捉えようとする。言い方を変えれば、どこまでを（あるいはどこからを）後置表現と認定するのかという規定を模索するものである。

3.1. 情報の検索について

先行要素を後置要素によって「言い換え」る、という行為には、検索の概念による理

論的な支えが不可欠である。言い換える情報をどのようにして導き出すか、という観点
が、2. 節で挙げたいいくつかの発話制約に関する理論的根拠をより強固なものにするの
ではないか。何故、このような制約が必要か、に関する理由を説明する方法としてもっと
も有効なのが、この検索の概念である。

情報を検索する、という行為は談話管理の対象範囲である。談話管理理論は、かいつ
まんだ言い方をすれば、情報の受け渡しという談話（会話もしくは対話）の根本的な構
造において、いかに情報を的確にマネジメントするか、という部分を扱う理論である
（談話管理理論についての詳細はそれぞれの先行研究を参照してもらいたい）。その中
でも、情報処理操作を標示するものとしてのマーカーには特に注目が集まっていると思
われる。

従来、単なる言い淀み・フィラーとして簡単に片付けられてきた感動詞・応答詞の類
が、実にさまざまな談話管理レベルでの情報を持っているということが明らかになりつ
つある。例えば、定延・田窪（1995）では、「ええと」「あの（一）」を中心として、談話
管理理論による、分析、特に検索の概念について深く考察を進めている。

3.1. 節では、談話管理理論を理論的基盤とし、「ええと」のような、検索処理をモニ
ターするマーカーが、言い換え後置要素に付加された場合の扱いについて検討する。

3.1.1. 談話管理におけるメモリ・モデル

言語で表現された情報を処理する、という方法を体系的に記述するためには、談話に
おける情報（知識）の格納方法をまず構築しておく必要がある。一般にメモリ・モデル
と呼ばれる、情報格納の方法は、長期／短期記憶という二項対立を出発点とし、先行研
究において言語学的な応用がなされてきた。ここでは、便宜的に、以下のようなメモリ・
モデルを構築することにする*7。

(66) データベース ⇄ 活性データベース領域 ⇄ バッファ

データベースはいわゆる長期記憶に当たるもので、知識の貯蔵を行う領域である。通
常、会話の最中に（直接）この領域にアクセスされることはない。バッファは、矢継ぎ
早に繰り出される情報を、その時その時に、一時保存しておく領域である。発話された
情報はまずここに保存される。そして、その処理が終了したら、バッファからは消去さ
れ、バッファにはまた次の発話された情報が保存される。活性データベース領域はある
会話において話題となっているものに関連する知識を格納しておく領域である。領域間
は不可分であり、明確な線引きはできない。が、役割の異なる心内領域の存在が情報処
理システムにおいて重要であることは確実といえる。

「検索」の概念については、ここでは次のように規定する。バッファ内に一時保存され
た情報について、活性データベース領域にアクセスし、関連した情報を探るのが検索で
ある。特に、本稿で問題としている、言い換え（あるいは repair）では、類似した情報

(表現の類似、内容の類似)を活性データベース領域内で検索すると考えることができる。つまり、検索とは、バッファと活性データベース領域の間の情報操作なのである*8。

3.1.2. 言い換え後置と検索マーカー

ディスクコースマーカーの中でも特に検索処理を標示するマーカーを取り上げる。「ええと、あの(一)」等の検索処理をモニターする表現についてである。これが言い換え後置に含まれる場合について検討してみる。具体的には、

- (67) そしたら部屋にないんですよ、ええと、楽屋に。
- (68) その辺にいると思うよ、あの、隣の部屋とかに。

のように後置要素の直前に検索マーカーが付加されているものを見てみる*9。

ここで問題となるのは、上のような表現を(言い換え)後置表現として認定できるのかという点である。基本的に「ええと、あの(一)」などの検索マーカーは心内の情報処理をモニターする機能しか持たないので、これらは後置表現として認定できる。このことは、言い換え後置としては許容されない表現に検索マーカーを付加しても、さほど許容度が上がらない、という現象からも指摘できる((69)(70))。

- (69) ??その辺にいると思うよ、ええと、隣の部屋に。
- (70) ??その辺にいると思うよ、あの、隣の部屋に。

情報処理の観点から見れば、「先行要素の情報のチェック → 情報の検索 → 検索結果の表示」という検索処理のプロセスは検索マーカーの付加の有無に関わらず心内において等しく行われていると考えられる。したがって、「ええと」「あの(一)」はあくまでモニターのみの機能となっているのである。

また、検索処理の視点から見ると、

- (71) 東京って広いね、とりわけ新宿って。
- (72) 東京って広いね、とくに新宿って。
- (73) これ、電池が要るよ、たぶん単三電池が。
- (74) なんかもズイこでも起きたんじゃない、もしかしたら事故とか。

これらの例「とりわけ、とくに、たぶん、もしかしたら」もまた、情報の検索処理をモニターしていると考えられる。しかし、これらは完全に検索処理だけをモニターしているのではなく、ある程度の取り立て的な機能も表示していると考えられる(どちらの機能が優先的であるかは不明であるが)。したがって意味としては「検索結果、取り立てて取り上げる情報がこれである」というような意味になるとと思われる。

幾分、議論が煩雑になってきたが、ここまでをまとめると、ここでの中心的議論は検索マーカーが付加された場合の言い換え後置の扱いである。とりあえず、検索マーカーが付加されていても基本的には言い換え後置として認める、というのが検索システムの分析による結論である。

3.1.3. 「情報構造の一致」と検索システム

言い換え後置表現において、「情報構造」が一致していない例は許容されない。既に見たとおり、そのような表現に検索マーカーを付加したとしても大幅な許容度の変化は見られない。

(75) *その辺にいると思うよ、隣の部屋に。

(76) ??その辺にいると思うよ、ええと、隣の部屋に。

(77) ??その辺にいると思うよ、あの、隣の部屋に。

しかし、以下のように、検索マーカーの直前にポーズを含んだ表現にした場合、それらはかなり自然な表現になる、あるいは相対的に (76) (77) よりも許容度が上がると思われる*¹⁰。

(78) その辺にいると思うよ。……ええと、隣の部屋に。

(79) その辺にいると思うよ。……あの、隣の部屋に。

この許容度の差は、先行要素に関する情報の検索処理方法の違いによるものと考えられる。

本稿でいう「検索」の処理段階には二種類あると考えられる。ここではそれぞれ「一次検索」「二次検索」と呼ぶことにする。一次検索は、被言い換え情報の「情報構造」を検索条件に反映させた検索である。つまり、そのような条件を持つ情報の集合にしかアクセスしない。上の例では、「曖昧な（確定していない）場所」という内容および表現形式を持つ集合にしかアクセスしないのである。この段階で検索が完了すればよいが、もし十分な結果が得られなかった場合にはどうなるのか。そこで「二次検索」という概念が必要となる。二次検索は一次検索よりも条件を緩やかにした検索であり、必ず一次検索の失敗後に行われる。緩やかな条件とは概ね、「情報構造」という枠組みをはずした条件である。まとめると以下ようになる。

(80) 一次検索：先行要素の情報構造確認→検索→結果表示

(81) 二次検索：一次検索の失敗→先行要素に対する演算（多くは「情報構造」の条件をはずす処理）→演算結果に基づく検索→結果表示

つまり、上の例の許容度の差は、一次検索と二次検索との違いによるものと捉えられるのである。

したがって、「情報構造の一致」が必要となるのは一次検索の段階ということになる。それで結果が出なければその条件をはずして再度検索にかけるという順序なのである。これを踏まえると、言い換え後置の発話に関する必要条件は「一次検索が行われ、その結果が表示されていること」ということになる。

検索には、「情報構造の枠組みを維持した検索（一次検索）」と「一次検索が失敗し、それに伴う再演算後の検索（二次検索）」という違いが認められる。そして、二次検索が「情報構造の一致」を条件として持たない以上、その結果の表示である(78)(79)を言い換え後置、すなわち後置表現としては認定できないのである。よって、表記上、句点によって区別している。情報の検索において最初の段階で必要となる条件が「情報構造」を一致させることであると考えられるので、これに反している表現は、見た目、後置表現と同じ形式であっても、先行要素と後置要素の両方に求められる「情報構造の一致」を条件的にはずしているという点で、言い換え後置表現とは認定できなくなる。

検索方法の違いが「情報構造の一致」制約の必要性を満たす要因となっている。

(82) 何人か呼んできてよ。……ええと、3人。

(83) 何人か呼んできてよ。……あの、3人。

これらが許容されるのは「……ええと」が二次検索をモニタリングするマーカーとして機能しているからである。もちろん、完全に機能が分担されているわけではなく、傾向差として捉えられるということである。「ええと、あの(-)」のみであれば一次検索をマークしやすく、「……ええと、……あの(-)」であれば二次検索をマークしやすいのである*11.*12。

3.1.4. repair との関連

検索は、話し手の心内領域だけで利用されるのではなく、interactive な会話においても、repair という概念により利用される。repair は「会話を円滑に進めるための修正(伊藤(1991))」と捉えられる。言い換え後置は「言い換え」なのであるから、そこに修正の機能が含まれていると考えられる。したがって repair の観点からの分析も必要であり、有効であると思われる。ただし、ここで扱うのは言い換え後置との関係上、要素レベルでの repair であり、それよりも大きなレベル(文相当)の repair は扱わない。したがって、本節で repair という場合には要素レベルの repair を指している。

次の二つの例を比較してみる。

(84) スケジュールが決まってないんですよ、日本のスケジュールが。

(85) スケジュールが、日本のスケジュールが決まってないんですよ。

(85)は「スケジュールが」という要素が、その直後で「日本のスケジュールが」に言い換えられている。これは典型的な repair の表現である。(84)の言い換え後置、(85)の repair 表現、両方とも情報的には「日本のスケジュールが」が「修正」の機能を担っている。もちろん、この二つの表現に何らかの違いが認められて構わない*13。しかし、言い換え後置であろうが、repair であろうが、何らかの検索処理過程を経ていることに変わりはないのである。その意味では、言い換え後置は repair の機能も持つとすることができる。(84)も(85)も情報処理の観点では repair の枠組みに入るが、言い換え後置は後置表現の枠組みにも入るのである。(85)は後置表現ではないので「単純な repair」として位置付けられる。

また、repair の機能的な側面を考慮すると、ここまでの議論で言い換え後置とは認定せず、かつ許容される表現もまた単純な repair として位置付けられる。

(86) その辺にいまするよ。……ええと、隣の部屋に。

(87) 何人か呼んできてよ。……あの、3人。

(88) 論文全然出来てないよ。……少しだけしか。

つまり、これらが許容されるのは、「会話を円滑に進める」という必要条件と、「二次検索」という十分条件が満たされているからなのである。

3.2. ポーズに関する問題

情報処理（談話管理理論）では、ポーズが何らかの処理をモニターするマーカーとして扱われることを見てきた。しかし、会話における参与者（話し手／聞き手）というレベルから見ると、ポーズはまた別の側面・機能を持つことになる。本節では、turn-taking system に基づいたポーズの機能を捉え、その要因によって、ポーズを含む場合は後置表現として認定できない、ということを示す。

会話管理（turn-taking system）の側面から見ると、ポーズは TRP（turn-transition relevance place）を発生させる機能を、その一つとして持っていると考えられる*14。ポーズが顕現することで turn が移動する可能性が生じるのである。次の話し手が新たに発話を構成する余地が現れるのである。これを考慮すると、ある発話において、次のような形式になった場合、後置表現として捉えることは困難になるのではないだろうか。

(89) あ、飛んでるよ、……飛行機。（単純な要素後置）

(90) あの人が殺ったと思うよ、……田中さんが。（言い換え後置）

会話という双方向的な情報のやり取りでは、話し手がポーズ後に何らかの情報を後置要素として付加しようとしても、その前に別の話し手に turn を奪われてしまうことも考えられる。このような観点から見ると、客観的には、実際の会話において、後置表現と

見られるものの中で後置要素の前にある程度の長さのポーズが挿入されているものは少ないと思われる*¹⁵。

会話を円滑に進めるためには、次の話し手が turn を得ようとするはずである。したがって、後置表現が完成する前に会話が進展してしまう可能性がある。

- (91) A あ、飛んでるよ、……、
B うん？ 何？
A 飛行機が。

現実的な問題として、このような可能性が存在する以上、分析の手段として、ポーズを含む表現を後置表現として認定してしまうのは非常に都合が悪いことになる。もし、(89)を後置表現として認めた場合、(91)の話し手Aの一連の発話も後置表現として認定しなければならなくなるのである。

もちろん、検索方法の違いも理由の一つとなる。3.1.3.節で見たように、ポーズは、二次検索をモニターしやすい傾向があるため、ある発話の後のポーズは、聞き手側の解釈としては、二次検索を標示するマーカーとして解釈される可能性が強くなる。また、TRPの発生という turn-taking system 上の規則により、次の話し手としての役割を得るという機能も持っているため、ポーズ後に何らかの情報が付け加えられたとしても、その情報を即座に先行する情報と関連づけて解釈することが難しくなると考えられる。逆に考えると、二次検索をモニターしやすいからこそ、そこに情報の切れ目のようなものが表出し、TRPが発生しやすくなってしまふのである。

聞き手が意識的にこのような解釈を行おうとしていると断言することはできないが、少なくとも、ポーズが何らかのより複雑な情報処理をモニターするマーカーであり、さらには会話展開において、TRPを設定するという機能も担っていることは事実であるといえる。それを踏まえると、「ポーズ+検索マーカー」の形式も含めて、ポーズが付加されている表現に関して、「二次検索モニターの可能性」そして「TRP発生の可能性」という二重の可能性の存在によって、後置表現として扱うことは避けるべきなのである。

- (92) その辺にいると思うよ。……ええと、隣の部屋に。(= (86))
(93) 何人か呼んできてよ。……あの、3人。(= (87))
(94) 論文全然出来てないよ。……少しだけしか。(= (88))

(92)～(94)の表現は repair によるアプローチだけではなく、ポーズの分析によっても後置表現とは認められないのである。

しかし、この規定はあくまで、分析の都合上、ポーズを含む表現は対象外としたほうがよいのではないかと、いうものである。実際の発話の上では、ポーズが入っていたとしても話し手は後置表現を完成させようとする意識があるはずで、そういった意識のレ

ベルで後置表現を認定しようとする、様々な問題が予想されるので、ここでは分析手段としての認定、という立場を取っておく*16。

3.3. 基本的な位置付け

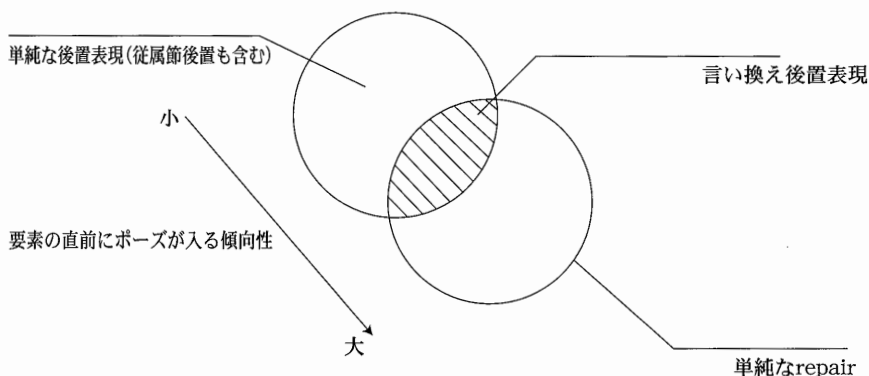
これまでの議論をもとに、後置表現および言い換え後置の位置付けを考えてみたい。

まず、言い換え後置が検索処理を経ている以上、同様の検索処理を行っていると考えられる repair と同じ範疇に入れることができる。その発話制約から見ても、repair 的な側面が強く現れている。「限定」「情報構造の一致」などはまさに「会話を円滑に進める」手段である。

とはいえ、言い換え後置は後置要素が先行文にかかっているということもまた事実であり、その点では本稿の冒頭で述べたとおり、後置表現の範疇にも入るといことになる。

そして、後置表現と repair とを区分するマーカーとして、ポーズが考えられる。ポーズは「二次検索」をモニターしやすい傾向にあるので、言い換え後置ではない表現に付加されるのである。したがって、ポーズが挿入された場合に後置表現とは認定できなくなる。後置表現と repair の間にも漠然とした境界が存在することになるのである。

それらを総合すると、言い換え後置の位置付けというのは以下の図のようになる。



これまでの検討により得られた結論は次のようになる。

- (A) 言い換え後置は言い換え (repair) と後置 (postposition) との狭間にある表現である。
 - (B) 後置表現 (言い換え後置) として認定しなかった例はすべて「単純な repair」の領域に位置付けられる。
 - (C) ポーズが挿入されて、より解釈が自然になるという傾向性があれば、談話管理・会話管理からの理由により、後置表現とは認定できなくなる。
- このような位置付けが可能となるのである*17。

4. おわりに

問題は山積しているが、特に後置表現の認定において理論的基盤とした談話管理および「検索」の概念に対する検証が不十分であること、またそこで挙げた「一次検索」「二次検索」という概念もより詳細な検討が必要である。本稿で利用したメモリ・モデルは便宜的であるため、言い換え後置、特に「検索」処理には当てはまるが、単純な要素後置においても当てはまるのか、という疑問も残る。また、作例による分析が大部分であったが、やはりコーパス等による数量的な裏付けは不可欠である。

いわゆる repair との違いを見るためにも、さらには後置表現が談話に特有の現象であるので、その意味では、情報処理に関連した語用論的な機能の記述が求められる。

しかし、言い換え後置という現象を見ることで、後置表現全体の位置付け、repair と密接な関わりを示すことができたのは、今後の後置表現研究において有効となるのではないだろうか。

<注>

- *1 なお、本稿におけるその他の用語規定をいくつか行っておく。後置表現における述語句までの部分（述語句を含む）を「先行文」と呼ぶ。その先行文以外の部分、いわゆる後置している部分を「後置要素」とし、例文では下線で示してある。また、言い換え後置表現において後置要素と意味的に対応している先行文中の要素（(1)での「部屋に」に当たる部分）を「先行要素」と呼ぶことにする。
- *2 先行する情報に対し、何らかの形で修正を加えることを repair と呼ぶ。詳しくは3.1.4.節を参照。
- *3 (7)～(10)のような、先行要素と後置要素が入れ替わっている表現について、本稿では区別をしない。情報的にはどちらの表現も等価であると考えている。もちろん、それぞれの表現から得られる文脈情報は若干異なる。だが、これらの表現が機能的にどのように異なるかは語用論レベルで論じる問題であり、別稿に譲ることとする。したがって、ここではどちらの表現も同じものとして扱う。
- *4 ただし、旧情報＝重要でない情報、新情報＝重要である情報というような一律的な情報構造の捉え方に関しては問題が残る。そもそも、新／旧という対立と重要／非重要という対立は情報の捉え方に対するレベルが異なっていると考えられる。この点、議論の余地が大きい。ここでは久野の原則を重要／非重要な対立にまで拡張したものと思ってもらいたい。以下の富樫（1998）における議論に関しても同様である。
- *5 (50)～(52)の例は話し手によって内省に出るようである。これは「10分」や「30分」を漠然とした時間として認知できるかどうかの違いであるといえる。
- *6 (53)～(56)の例も無理に解釈しようとすれば可能となる。が、それは先行要素あるいは後置要素の情報をもう一方の情報に合わせて解釈しているにすぎない。これは会話を円滑に進めるための、聞き手に求められた基本的な方略であると考えられる。本稿の議論としては、直感的な内省として判断すると、許容度が下がることが確認されればよいのである。
- *7 アプローチの異なりにより、用語が違っていたり、細分化がなされていたり、といったような違いがあるが、大まかな設定として心内領域を3つの領域に分ける、という点は同じである。また、例えば、いわゆる information structure の分類とも並行的な考え方になると思われる。Chafe (1987) の active、semiactive、inactive という情報の三分類などを参照のこと。

- *8 ここでは、談話の開始部あるいは話題が推移する部分において新しい話題を探す、というような処理は「検索」としては扱わない。発話された情報についての何らかの「検索」のみを検討する。
- *9 表記の都合上、検索マーカーの直後に読点を付してある。これは表記の見やすさを考慮したものであり、実際の発話でポーズを挿入するという意味ではないことを断っておく。なお、後に挙げるとおり、ポーズに関しては「……」で表記している。
- *10 もちろんこれはあくまで傾向差であり、必ずこういう形式で発話されなければならないというものではない。検索を含む、談話における情報処理には個人差があって当然であり、これらの例がポーズを挿入しなくても許容されることに対しては問題がない。例の判定については、相対的にポーズが挿入されたほうが理解しやすいことが確認できればよいのである。
- *11 例えば「ええと……」という順番でのマーカーの顕現は非常に許容しにくい。これを考慮すると、ポーズのほうが二次検索をマークしているのではないかと思われる。例えば、杉藤(1988)では、「…これは、人間が他者の話を聞いて理解する場合に、まずことばを短期記憶に入れ、リハーサルによりこれを長期記憶に入れ記憶に止める。このような脳の情報処理の時間としてポーズの時間が当てられているものと考えられる。(p.359)」と述べられている。検索マーカーもポーズも情報処理をモニターするマーカーの部類に収められるが、検索マーカーは一次検索をモニターしやすく、ポーズは二次検索をモニターしやすいのではないだろうか。しかし、ポーズ単独での二次検索モニターはそれほど許容度が高くない。
- (a) ?確かに誰かがそこを通りましたよ。……太郎が。
このことは必ずしもポーズそのものだけが二次検索をモニターしているわけではないといえる。
- *12 この検索システムに、定延・田窪(1995)の二段階の検索を含めて考えることができる。このモノ自体およびモノの名前の検索は「一次検索」「二次検索」それぞれの下位範疇であると考えられる。
- *13 本稿では情報が重要であるかどうかという議論は問題としない。重要かどうかは結局、解釈の問題であるから、メモリ・モデルや検索システムとは直接には関わってこない。もちろん副次的には関わっているのが、それもここで取り上げるほどの問題ではない。
- 情報の重要性について、(85)のような repair 表現と言ひ換え後置を比較すると、結局、藤井(1991)のこのような「有標情報の完成」を先にするかどうかというところに違いを集約することができる、ということを使うだけにとどめておきたい。
- (b) スケジュールが決まってないんですよ、日本のスケジュールが。
(c) スケジュールが、日本のスケジュールが決まってないんですよ。
- つまり、(b)の場合「決まっていないこと」に話し手が有標性を与えるため、結果として後置要素「日本のスケジュールが」は補足的な情報として解釈される。それとは逆に(c)では、「日本のスケジュール」という情報に有標性を与えたいため、表現全体が確定していないうちに repair として挿入していると考えられるのである。本節で扱うべきは、まさにこちらの問題なのかもしれないが、これは別稿に譲ることとする。
- *14 turn-takingの規則に関しては Sacks, Schegloff and Jefferson (1974)、西阪(1995)等を参照。
- *15 もちろん、コーパス等による数量的な分析が必要になるが、本稿ではそこまで到っていない。先にも述べたが、あくまで仮説として何らかの傾向がでるのではないかという、問題提起である。
- *16 もっとも、ポーズそのものだけが発話の区切りとして認識されているわけではない。ポーズが挿入される直前の発話要素のイントネーションも大きく関わってくる。杉藤(1988)参照。
- *17 このような位置付けを考える場合、必ず議論されるのが、後置表現は「一文」なのか「二文」なのかという問題である。しかし、「文」という概念がそもそも曖昧であり、いまだに

確固とした定義がなされていない。さらには談話において多く見られる後置のような現象を「文」として区切ることにどれほどの意味があるのかという疑問も残っている。仮に、後置表現が「一文」か「二文」ということであれば、本稿では、言い換え後置を含む後置表現を「一文」として捉え、それ以外の表現を「二文」として捉えておく。が、この立場が本稿の研究において大きな意味を持つものではないことを断っておく。本稿において、一貫して「後置表現」という記述を用いたのもそのあらわれである。

参考文献

- Chafe, Wallace L. (1987) *Cognitive constraints on information flow*. Coherence and grounding in discourse, ed, by R. Tomlin
- 藤井洋子 (1991) 「日本語における語順の逆転 —談話語用論的視点からの分析—」『言語研究』No.99
- Fujii Yoko (1992) *The pragmatics of main clause preposing in Japanese spoken discourse*. Journal of University of the Air,10 (放送大学研究年報 10)
- 藤井洋子 (1995) 「日本語の語順の逆転について —会話中の情報の流れを中心に—」『日英語の右方移動構文 —その構造と機能—』高見健一編：ひつじ書房
- Grice, Paul H. (1975) *Logic and Conversation*. Syntax and semantics,3
- Hayashi Makoto (1994) *A comparative study of self-repair in English and Japanese conversation*. Japanese/Korean Linguistics 4, ed, by Noriko Akatsuka
- 伊藤博子 (1991) 「対談番組における 'Repair'」『日本語学』Vol.10, No.6
- 国立国語研究所 (1960) 『話しことばの文型 (1)』国立国語研究所報告 No.18
- 久野璋 (1978) 『談話の文法』大修館書店
- 牧野成一 (1983) 「省略と反復」『講座日本語の表現 5 日本語のレトリック』中村明編：筑摩書房
- 丸山直子 (1996) 「話しことばにおける文」『日本語学』Vol.15, No.8
- 宮地裕 (1984) 「倒置考」『日本語学』Vol.3, No.8
- 中田智子 (1991) 「会話にあらわれるくり返しの発話」『日本語学』Vol.10, No.10
- 中田智子 (1992) 「会話の方策としてのくり返し」『国立国語研究所報告』No.104
- 西阪仰 (1995) 「く会話をフィールドにした男」サックスのアイデア」『言語』Vol.24, No.7 ~ No.12
- Sacks, Harvey., Emanuel A. Schegloff and Gail Jefferson (1974) *A simplest systematics for the organization of turn-taking for conversation*. Language,50
- 定延利之・田窪行則 (1995) 「談話における心的操作モニター機構 —心的操作標識「ええと」「あの(ー)」—」『言語研究』No.108
- 杉藤美代子 (1987) 「ポーズとイントネーション」『談話行動の諸相 座談資料の分析』国立国語研究所報告 No.92
- 杉藤美代子 (1988) 「談話におけるポーズとイントネーション」『講座日本語と日本語教育』第2巻：杉藤美代子編：明治書院
- 高見健一 (1995a) 『機能的構文論による日英語比較 —受身文、後置文の分析—』くろしお出版
- 高見健一 (1995b) 「日英語の後置文と情報構造」『日英語の右方移動構文 —その構造と機能—』高見健一編：ひつじ書房
- 田窪行則 (1990) 「対話における知識管理について —対話モデルからみた日本語の特性—」『アジアの諸言語と一般言語学』崎山理・佐藤昭裕編：三省堂
- 田窪行則 (1992) 「談話管理の標識について」『文化言語学 —その提言と建設』三省堂
- 田窪行則 (1995) 「音声対話の言語学的モデル —談話管理標識としての感動詞」『情報処理』Vol.36, No.11
- 田窪行則・金水敏 (1997) 「応答詞・感動詞の談話的機能」『文法と音声』音声文法研究会編：

くろしお出版

田中穂積 (1992) 「談話の理解とメモリ・モデル」『認知科学ハンドブック』石崎・波多野編：
共立出版

富樫純一 (1998) 「従属節の後置」『筑波日本語研究』3 筑波大学文芸・言語研究科

坪本篤郎 (1998) 「主題が後置された文—日英語比較とその問題点—」『人文論集』49 静岡大学

附記 本稿は平成10年度国語学会春季大会（於白百合女子大学）での研究発表に大幅な加筆・
修正を施したものである。有益なコメントを下された諸先生方にこの場を借りて厚く御礼
を申し上げたい。

（とがし じゅんいち 筑波大学大学院博士課程 文芸・言語研究科 日本語学）